

頼諭の有相無相の四重秘釈について

——『大日経』、『瑜祇経』の証文を中心に——

中村賢識

一、はじめに

四重秘釈は、ある事柄を解釈する際に用いられる、真言密教独自の解釈方法である。この四重とは、浅略・深秘・秘中深秘・秘々中深秘のことをいう。これは『大日経疏』と『不思議疏』を典拠とした考え方であり、東密の学匠らによって盛んに用いられてきた。その中でも、道範（一一七八～一二五二）の『光明真言四重釈』に用いられていることは有名であり、道範研究においてたびたび触れられてきた。しかし、四重秘釈について考察された研究は数少ない。四重秘釈の主な先行研究には、松崎惠水氏¹、藤田隆乘氏²があげられる。松崎惠水氏は、『光明真言四重釈』をもとに、古来より民衆の信心指導の上に四重秘釈が活用されていたことを明らかにし、布教の面より再評価を行った。藤田隆乘氏は、頼諭（一二二六～一三〇四）の四重秘釈は有相無相の解釈によって、加持身説の論拠を示していることと、理性院流や地藏院流の印信口決より、事相法流に源流があることを指摘した。

また近年では、高柳さつき氏³や田戸大智氏⁴が、金剛三昧院周辺で著された『真禅融心義』（伝栄西）や『菩提心論開見抄』（『開見抄』、伝実範）に、頼諭が説く有相無相の四重秘釈に類似する解釈方法が用いられていることを指摘し、

その前後関係について明らかにした。

このように四重秘釈は、密教独自の解釈方法であるにも関わらず、有相無相の論義に関していえば、栄西(一一四一～一一二五)にゆかりのある金剛三昧院周辺の著作にも用いられているなど、その成立はいまだ明らかになっていない。そこで本研究では、頼諭の四重秘釈についてまとめ、有相無相の論義を取り上げることによって、他宗との関連からその源流を考察し、その後の展開までを調べてみたい。なお、書き下しに関してには經典名に『、引用文「」を付して記した。

二、頼諭の四重秘釈について

真言密教では、ある事柄を解釈する際に、浅略・深秘・秘中深秘・秘々中深秘の四重に分けて解釈する方法がある。これを四重秘釈という。このような考え方は、『大日経疏』巻三に説かれる、

また此の経の文に浅略深秘の二釈有り。深秘釈の中についてまた浅深有り^⑤

という「具縁品」の文と、『不思議疏』の、

問う、阿は誰か本法に向かつて呼んで、本不生を造するや。答う、三重有り。一には秘密釈、二には秘密中の秘釈、三には秘秘中の秘釈なり。一に秘密釈とは、毘盧遮那仏、本不生を説くが故に。二に秘密中の秘釈とは、阿字自ら本不生を説くが故に。三に秘秘中の秘釈とは、本不生の理に自ら理智有り、自ら本不生を覚るが故に^⑥

の文を組み合わせて成立したと古来より伝えられている。

これは安然(八四一?~九一五?)の『胎藏金剛菩提心義略問答抄』(『菩提心義抄』)に、四家大乘の解釈方法に対して、若し、『大日經義釈』に三種積有らば、此の經文に云うが如し。浅略積有り、深秘積有り。深秘中にもまた浅深有り。若し、『供養法疏』にもまた三種有らば、一に深秘積、二に秘中深秘積、三に秘秘中深秘積なり。両文を相合して即ち四種と成る^⑦。

と真言宗の解釈として、『大日經義釈』と『不思議疏』を典拠に四種あげていることよりも明らかである。

このような四重秘積は、有相無相、五供養、弥勒菩薩(諸仏諸菩薩)の分齊、について解釈する際になどに用いられるとされる^⑧。なかでも、有相無相の四重秘積は、頼諭が加持身説の論拠として用いたことで重要な概念の一つである。有相無相の四重秘積は、世界の実相について有相か無相かを論じたものである。そこで一般的に、有相無相の四重秘積といった場合は、頼諭の説く「遮情無相」(初重)、「有相有相」(第二重)、「無相有相」(第三重)、「無相無相」(第四重)のことを指す。そこで、頼諭の『大日經疏指心鈔』(『指心鈔』)をみてみると、以下のように四重秘積の証文が記されている。

初重の遮情無相では、

謂く、九種迷情の妄仮相を遮するが故なり。『經』に「青に非ず、黄に非ず」等と云う是れなり。此の説は顕家の百非洞遺果性不可説に同ず。故に大師は天台に同ずと雖も、浅深無きに非ず。彼の四言及はざるが故に、此れ義の如く執を破す故なり。後の表徳顕実の中に三有り^⑩。

と『大日経』^①を典拠に、天台宗などの顕教を遮情、密教を表徳としている。これは『指心鈔』巻一五でも、

「然も此の心は在纏と出纏とに皆な畢竟して無相なり」とは、真言行者の初めの此れ浄菩提心なり。謂く、此の菩提心に遮表の二義有り。遮情無相は、一道・極無の無相の空理に似て同じ。故に「即是乃至無相」と云うなり。上に、「謂く自心の畢竟するに空なる性を観ず」と言うは、一道・極無の玄底で、一心無相の極理なり^②

という一文に続いて弘法大師空海（七七四〜八三五）の『秘蔵宝鑰』より、

謂く、無相虚空相及び非青非黄等の言は、並びに是れ法身真如一道無為の真理を明かす。仏、此れを説いて初法明道と名づく。『智度』には入仏道の初門と名づく。仏道と言うは金剛界宮大曼荼羅の仏を指す。諸の顕教に対しては是れ究竟の理智法身なり。真言門に望むれば、是れ則ち初門なり^③

という一文を引用していることから、空海の説によつて顕教を遮情にして、真言行者の初門の浄菩提心であることを述べている。

第二重の有相有相では、

自性法身は、劣恵の為に説くところの五部三密等の軌則なり。『経』に云く、「当来世の時に於て劣恵の諸の衆生は、唯だ有相に依つて、随順して是の法を説く」と文り^④

と『大日経』^⑤を典拠に、自性法身が劣恵のために説く五部三密などの軌則を有相としている。これは『指心鈔』巻

一五でも、

經中には但だ浅略鈍機の密行を挙げ、『疏』は釈して深秘利根の深行を加うるなり。斯れ則ち真言利鈍の行を以て、能所寄斉と為すなり。但だ鈍機所行の無畏の中で、顕に順じて釈を作す故に、顕密の差別自ずから顕わる。故にまた云く、顕を所寄斉と為すと云うは違い無し¹⁶⁾

と『大日經』に説かれる浅略鈍機の密行に加えて、『大日經疏』では深秘利根の深行を述べているため、機根に応じて顕密の差別があることを述べている。そこでこの後に、『秘密曼荼羅十住心論』(『十住心論』)を引用して、真言行者の住心に次第があることを示したあとに、先の『大日經』と『大日經疏』を引用し、次のように述べている。

此の文は有相無相に次の如く劣深二機の所行を明かすなり。故に知んぬ、今の文は常途に順じて釈を作し、扱地造壇等の有為事迹を擬儀して、修証の深淺を顕わすなりと言わんとぞ¹⁷⁾

ここでは、機根の違いによって、有相無相に勝劣があることを述べている。

第三重の無相有相では、

謂く、勝恵に被むり説くところの举足下足は皆、是れ密印。舌相所転は皆、是れ真言等なり。大師の釈に云く、「若し乳字門に入らば、悉く一切の相を離る。離相の相は相として具せざること無し」と文り。また『經』第七卷に云く、「甚深無相の法は劣恵の堪えざるところなり、彼等に応ぜんが為の故に、兼ねて有相の説を存せり」と文り。此の文の無相は今の重を証し、有相は前の重を証すなり¹⁸⁾

と『十住心論』⁽²⁰⁾を典拠に、阿字門に入るとすべての相を離れるため、無相であることを述べている。そこで『大日経』を引用して、文中にある無相を第三重、有相を第二重に配置している。また、この『十住心論』の文は卷二でも、

問う、前に無相法身と云い、今、何ぞ三密を具すと云うや。答う、無相は顕教遮情の妄仮の相に約す。三密は即ち真言表徳の眞実の體に就くが故に、違い無きのみ。或いは無相不具の故に無相と云うなり⁽²¹⁾

という一文に続いて、表徳の無相を述べるための典拠として引用されている。さらに卷一二でも、

顕乗の如来は無相不具の義を知らざる故に、今此の無相は是れ九種妄仮の像貌を得ず。故に尚、「不能得其像貌」と云うなり⁽²²⁾

と顕教の無相と異なることを述べるための典拠として、『十住心論』の一文を引用している。

第四重の無相無相では、

自証は勝劣二機も及ばず。言心は兩種俱に絶す。然れども理智宛然して都て無なるに非ざるが故に、自ら理智有りて本不生を覚るを、自証三菩提と云うなり。『疏』第十九に云く、「当に知るべし。此の空は是れ自証の理なり。想は既に空して所有無ければ、名も亦た是の如し」と文り。「私に云く、想とは一一心、名とは如義語なり」また云く、「究竟して自証不思議空の法の中において、而も一切の功德を具す。○自然智が此の字門を加持するに由るが故に、無量の語を生ず」と文り。「自証空の法の中に自ら理智有り、不空を覚るが故に云く、而して一切功德

を具す。此の徳は皆、無想なるが故に空法と云うなり』『瑜祇經』に云く、「我れ本より言有ること無し。但し利益の為に説く」と支り。「我れ本より言有ること無しとは、本地自証位なり。『疏』に云く、自証の理は是れなり。但し利益の為に説くとは、勝劣二機に有相無相の意を教えられる。『疏』に依り自然智が加持して無量の語を生ずは、是れなり」

〔一〕内は割注

と『大日經疏』と『瑜祇經』を典拠にして、本地自証位に言心が絶することを述べている。そこで初重から第四重を整理すると、以下のようになる。

○遮情門 Ⅱ 顯教

(衆生利益の方便)

初重(淺略)

Ⅱ 遮情無相

・「青に非ず、黄に非ず」、『大日經』

○表徳門 Ⅱ 密教

(衆生利益の方便)

第二重(深秘)

Ⅱ 有相有相、劣機

・「当来世の時に於いて劣惠の諸の衆生は、唯だ有相に依つて、隨順して是の法を説く」、『大日經』⁽²⁷⁾
・「甚深無相の法は劣惠の堪えざるころなり、彼等に應ぜんが為の故に、兼ねて有相の説を存せり」、『大日經』⁽²⁸⁾
第三重(秘中深秘) Ⅱ 無相有相、勝機

・「甚深無相の法は劣惠の堪えざるころなり、彼等に應ぜんが為の故に、兼ねて有相の説を存せり」、『大日經』⁽²⁹⁾

賴瑜の有相無相の四重秘釈について

・「若し乳字門に入らば、悉く一切の相を離る。離相の相は相として具せざること無し」、「十住心論」⁽⁴⁰⁾
 (自証無相位)

第四重(秘秘中深秘) Ⅱ 無相無相

- ・「我れ本より言有ること無し。但し利益の為に説く」、「瑜祇經」⁽⁴¹⁾
- ・「当に知るべし。此の空は是れ自証の理なり。想は既に空して所有無ければ、名も亦た是の如し」、「大日經疏」⁽⁴²⁾
- ・「究竟して自証不思議空の法の中において、而も一切の功德を具す。……(中略)……自然智が此の字門を加持するに由るが故に、無量の語を生ず」、「大日經疏」⁽⁴³⁾

このように『指心鈔』では、有相無相を四重に分けて解釈している。このような解釈は、『大疏第一愚草』⁽³⁴⁾、『瑜祇經拾古鈔』⁽³⁵⁾、『顕密問答鈔』⁽³⁶⁾、『金剛頂經開題愚草』⁽³⁷⁾、『阿字秘釈』⁽³⁸⁾等でもみることが出来る。そのほかに、頼瑜の四重秘釈は、『十住心論衆毛鈔』の「於深秘釈中又分顯秘事」⁽⁴⁰⁾にもみられる。

そこでこれらの著作をふまえて整理すると、有相無相の四重秘釈のうち、初重と第二重は『大日經』、第三重は『大日經疏』⁽⁴¹⁾、『十住心論』⁽⁴²⁾、『五輪九字秘密釈』、第四重は『瑜祇經』⁽⁴³⁾、『尊勝儀軌』⁽⁴⁴⁾、『大日經疏』⁽⁴⁴⁾、『性靈集』⁽⁴⁵⁾を典拠としている。なお『阿字秘釈』は、月輪・阿字の有相無相について述べられているため、第二重で『心地観經』⁽⁴⁶⁾、『菩提心論』⁽⁴⁷⁾、『大日經疏』⁽⁴⁸⁾、『異本即身成仏義』⁽⁴⁹⁾も典拠としている。

これらを見ると、頼瑜は覺鑊(二〇九五―一四三三)の著作を第三重、空海の説を第四重の典拠として用いていることがわかる。したがって、真言宗古来の説との齟齬をなくしながら、自証無相位を説いているかのようにも思える。いずれにしても、有相無相の四重秘釈は、特に説法の有無について述べていたとされる。これは藤田隆乗「二〇〇二」に、「加持身説法説を提唱する頼瑜にとつて、自証極位無相の立場は重要な教理学的論拠であった。頼瑜は自証極位について、有相無相の四重秘釈を立てて解釈している」⁽⁵⁰⁾とあることから明らかであり、加持身説提唱に有相無相の

四重秘釈が関連していることがわかる。

また藤田氏は、事相面からも考察を行い、「道教不共ノ大事」⁵¹では第三重を思量分別の及ばない大不二の位として
いることから、「道教不共ノ大事」を相承したことは、加持身説の教学的提唱（教相）に実践的（事相）確信をもた
らしたと推察するものである⁵²とした。またさらに、真空より受法した理性院流の印信に記される第四重が、定海
（二〇七四～二四九）門下の元海（二〇九四～二五七）が記したとされる地蔵院流実勝方の印信に記される第四
重（第三重⁵⁴）印明に似て、六大本有を述べていることから、その同一性を示唆した。

したがって、加持身説提唱には理性院流と地蔵院流の受法が関連しているといえる。しかしながら、『指心鈔』等
の教主義に関する著作の成立年次（一二七五年前後）と地蔵院流第三重印可の受法年次（一二七九年）との前後関
係については述べられていなかった。また、そのほかにも考察すべき点があり、頼諭の説く有相無相の四重秘釈と事
相受法については、何らかの関係性が認められるものの、いまだ不明な点が多い。

以上のように、頼諭の有相無相の四重秘釈は、加持身説提唱に関わる重要な問題である。そこで近年では、高柳氏
や田戸氏によつて、金剛三昧院周辺を拠点として密禅併修を実践していた東密僧⁵⁵の著作とされる『真禅融心義』（伝
栄西）や、同じく密禅一致に立脚したとされる東密僧⁵⁷の著作とされる『開見抄』（伝実範）に、頼諭の有相無相の四
重秘釈に類似する四重秘釈が説かれていることが示され、他宗との関連性について述べられている。また金剛三昧院
は、木幡の真空（一二〇四～一二六八）が長老に就いていたこともあることから、木幡の三重釈との関連も憶測され
ている。

したがって、有相無相の四重秘釈は、学頭などによる教学的影響⁵⁸や、印信伝授などの事相面による影響のほかに、
他宗との関連、あるいは他宗からの影響を受けて述べられた可能性も想定しなければならない。そこで以下よりは、
有相無相の四重秘釈の典拠となった証文が他宗ではどのように理解されていたのか考察してみたい。

なお今回は、その中でも比較的多く述べられている「真実事行品」の一文と、『瑜祇経』の文をめぐった解釈の違

いについてみていきたい。

三、天台における有相無相の解釈―窪田哲正氏の研究をふまえて―

真言密教には、法門を解釈する方法に十六門(十六玄門)あることが、空海によって述べられている。すなわち、遮情、表徳、浅略、深秘などである。したがって、有相無相の論義も、古来よりこのような解釈方法によって説かれてきた。そこで有相無相の十六門の振り分けは、『大疏百條第三重』巻五の「無相至極」に、

先づ、自宗において、有相無相の法門の重数を云うに二義有り。一には、自証説の学者の義は、無相は遮情の法門、即ち浅略の重なり。有相は表徳の法門、即ち法仏自内証の法門なるが故に深秘なり。六大四曼五相三密等の諸法門、皆是れ表徳有相の重なり。自証極位に住して両部大経を説く。其の所説の法門とは、此の表徳有相の法門なり。此の位は機に被むる法門に非ざるが故に、浅深の重無し。故に宗の意は無相を以て浅と為し、有相を以て至極と為すなり⁽⁵⁾

とあるように、自証説の学者は無相を遮情(浅略)、有相を表徳(深秘)としている。しかしこの自証極位は、機に被る法門ではないので浅深がないという。

このように東密では、「密教の無相は、有相に対す語ではなく、有相はそれぞれ差別の有相の一相に一切相・無限相が本来、具わっているから無相である⁽⁶⁾」というように、有相無相に浅深はないが、無相を浅略、有相を深秘として述べてきた。

これに対して天台では、『大日経』卷七の「真実事行品」に、

甚深無相の法は劣慧の堪えざるところなり。彼等を度せんが為の故に、兼ねて有相の説を存せり⁽⁶¹⁾

とあることから、無相の優位性が唱えられてきた⁽⁶²⁾。

早期の例としては、安然の『真言宗教時義』（成立年不詳）に、法相宗より真言法門に向けられた七つの疑難に「真実事行品」の一文があることを挙げ、次のように記している。

また真言法は、劣慧の者の為に、仏は方便を以て有相行を説く。其の劣慧の者は、凡夫二乗にして上智を為すに非ず。無相行に非ず⁽⁶³⁾

このように法相宗では、真言法は仏が劣慧の為に説いた有相行であり、上智の為の無相行ではないと理解している。これに対して安然は、

「亦た普く一切衆生を為さず云云」故に知んぬ、凡夫二乗を為さず。而して上文に云う、「劣慧の諸の衆生は、随順して是の法を説く」とは、是れ未来劣慧の衆生は内証を知らず、唯だ自身を愛で災いを除き福を求めると為し、仏は此の法を以て彼の衆生に与う。即ち此の門において、仏道に引入るが故に、時と方とに壇を立て修法等の事を説く⁽⁶⁴⁾

と「具縁品」⁽⁶⁵⁾の文によって、無相行が凡夫二乗の為の説ではないことを述べている。一方で、有相無相の優劣につい

ては述べられていないため、仏が劣慧のためには方便としての有相行を説き、上智のためには無相法を説いたとすることに對して、異義がなかったともみられる。⁽⁶⁶⁾

しかし安然以降になると、証真（一八一八）が『天台真言二宗同異章』（一一八八年成立）の中で、

若し利根の人は、唯だ無相観念を用う。若し鈍根の人は、有相方便を兼助す。故に天台に云く、「理観は勝ると雖も、若し鈍根の人は有相を兼ねずんば、理に入ること能わず。利人は但だ、理観を用いて理に入る。」「『浄名疏』に出づ」今、末代の人は、其の根既に鈍なり。故に三密行有相方便は、最も今の世の行者の要とするに堪えるなり。⁽⁶⁷⁾

〔一〕内は割注

と利根の人は無相観念、すなわち理観によつて理に入ることができるが、鈍根の人は有相方便である三密行を修行の要としなければならないとし、三密行（有相）よりも理観（無相）が優れていることを述べている。

そこで頼諭の時代になると、円爾弁円（一一二〇二〜一一二八〇）の講説書とされる『大日経見聞』（一一七二年成立）巻三にある「具縁品」の中で、「真実事行品」の一文を用いて次のように述べている。

問う、真言密教の意は但だ、有相曼荼羅法門に開いて劣慧の鈍根者を摂る者か、如何。答う、劣慧の者の為には有相曼荼羅を開いて之を摂る。利根の者の為には菩提心を以て之れを摂るなり。……（中略）……問う、七巻に云く、「甚深無相法は劣慧の堪えざるところなり。彼等に応ぜんが為の故に、兼ねて有相の説を存せり」と文り。しからば、利根勝慧の者の為に甚深無相法を以て之を摂り、鈍機劣慧の者の為に有相曼荼羅を以て之を摂るか。答う、然るべきなり。⁽⁶⁸⁾

ここでは劣慧のための有相行、勝慧のための無相法であることを述べている。また卷八にある「持明禁戒品」でも、

世間に従つて出世に至るは、有相に従つて無相に入る。此れは是れ密教の大綱。行者の通相なり⁽⁸⁾

と世間に従つて出世間に至ると同じく、有相に従つて無相に入ることが密教の大綱であることを述べている。

以上のように、安然是有相無相の優劣について言及していなかったものを、証真や円爾弁円は機根の違いによってその優劣を明らかにした。したがって、その優劣が次第に明確になっていったとも考えられる。そこで次に、頼諭と同時代の天台僧はどうだったのか詳しく見ていきたい。

宣淳(一二二四〜一三〇七)は、『明矢石論』(一二九九年成立)の中で「真実事行品」の一文を引用して、次のように明確な比較を行った。

文意は、無相甚深の教は言断心滅して、劣慧の堪えざるが故に、仏は方便力を以て、事相の曼荼羅等に寄せて、初心者の心を摂りて誘引せしむ。是れは則ち、顕教は無相を談ずるが故に勝り、密教は有相を説くが故に劣るなり⁽⁹⁾

このように顕教で説く無相が、密教で説く有相よりも優れていることを述べている。

また心賀(一二四三〜一三二〇)も、『二帖抄』(一一三〇年成立)にある「真言天台同異事」の中で、「真実事行品」を引用して比較している。⁽¹⁰⁾

真言行法の三密五相の修行は、「兼存有相説」の下に之を立つ。甚深無相のところを直に行じて宗を立てる事は、劣恵の堪えざるところなれば、之を許さず事なり。天台は天真独朗の真如理智なるところを直に行じて宗を立て

たるなり。豈に勝劣非ずや⁽⁷²⁾

このように天台では真如理智を直に行っていることを明らかにし、その優劣を述べている。真如理智を直に行じるとは、「真言宗は阿字起こりての宗」に対して、天台が「真如理智一方も起こらざる処に宗を立つ」ということである⁽⁷³⁾。これは、安然の『菩提心義抄』に説かれる「阿字四重釈」を典拠として述べている。すなわち、「梵王説阿字」（初重）、「大日説阿字」（第二重）、「阿字説阿字」（第三重）、「真如理智説阿字」（第四重）と説く、阿字についての四重解釈である。また『雑々抄』（一四五〇年頃成立）によれば、初重から第三重は「真実事行品」の「兼存有相説」を典拠としていることから、真如理智を直に行じる甚深無相を重視していることがわかる。

以上のように、天台では「真実事行品」の解釈をめぐって、安然のころより、真言に対する天台の優位性が述べられるようになり、次第に明確化していった傾向がみられる。しかしながら、無相に対する有相法の優位性もまた述べられており、光宗（一三一七）の『溪嵐拾葉集』（一三二一〜一三四八年成立）に収められている「菩提心義抄」では、澄尋（一二四一〜一三一八）の説として、次のような四つの説を紹介している。

- ① 龍猛大士が最初に陰陽の法術等を弘通し給う時、道士法に付く有相の扱地造壇等、これ有り。「兼ねて有相説を存せり」等と云うなり。次に今、大日経王等の説は、皆是れ甚深の無相教法なり。故に「無相甚深」の説なり⁽⁷⁴⁾
- ② 『大日経』「住心品」の如実知自心の菩提心は、是れ勝義みな空の法門。故に「無相甚深の法」の説なり。次に「具縁品」過去の有相の扱地造壇は兼ねて劣恵の処の有相三密の法なり。故に「兼ねて有相の説を存せり」と云うなり⁽⁷⁵⁾
- ③ 無相法身の三密は、かつて手印標示の儀相に非ざるを以つなり。……（中略）……「無相甚深の法」と云うなり。然して劣機の為には「無相甚深の法」、即ち是れ修成顕得方便と成るが故に、「兼ねて有相説を存せり」と云う有るなり⁽⁷⁶⁾

④凡そ秘密宗の意は、無相甚深の法の上に有相高しと習うなり。ゆえに有相は全て相なり。無相は全て有相なるがゆえに、相無相甚深と説くなり。……（中略）……重薬は重病を治す如きと解くなり。凡そ無相甚深の教は力の及ばずどころ。三密法は能くこれを益す。故に、無相甚深の法の上に真言の有相高しと云う意なり⁹⁹

このうち④は、有相法の優位性について述べている。そのほか、①については判然としないが、②③は劣慧のための有相について述べられ、③は証真と同様に劣機のために有相三密行を説くことが述べられている。

以上のように、天台においては「真実事行品」の解釈をめぐって、有相に対する無相の優位性が述べられ、次第に明確化していった傾向が見られる。しかしそれは同時に、複数の説ができたことになるので、光宗のころになると諸説あることが述べられるようになった。

四、禪における無相の解釈 —— 『瑜祇経』の解釈をめぐって ——

頼諭が説く有相無相の四重秘釈は、遮情と表徳の違いより顕教と密教の二つに大きく分けた上で、「真実事行品」を典拠にして無相行の優位性を述べていた。しかしながら、古来より真言宗では有相が表徳であることが述べられていた。「真実事行品」は、安然のころより無相行の優位性を示すために、天台僧によってたびたび用いられてきた典拠である。したがって、頼諭は古来の説によらず、安然などの天台僧の説に同意する解釈を行ったとも考えられる。

このように一見すると、頼諭は安然以降の天台の解釈を踏襲しているかのようにみえるが、最終的には『瑜祇経』を典拠にして、「真実事行品」によって説いた無相の上に、さらに無相を説いた。この無相上の無相では、『瑜祇経』の「我れ本より言有ること無し。但し利益の為に説く」の一文を用いて、自証無相位にして利益の為に説くことを述

べていた。

先述したが、天台では有相に対する無相の優位性を述べていた。しかしながら、これらの著作では、『瑜祇経』の一文を典拠として用いることがなく、また言及されることもなかった。そこで、頼瑜が無相無相を説くための典拠とした『瑜祇経』の一文は、当時どのように解釈されていたのか、注釈書等よりみていきたい。

『瑜祇経』は十二品からなり、真言宗では両部不二の深義を説く経典として重視されている。しかし、深秘な経典であるため、第二・五・七の三品を除いた九品は伝法灌頂者のみに授けることを做としている。そのためか、『瑜祇経』全体の注釈書は数少なく、頼瑜以前にみても安然、実運（一一〇五〜一一六〇）、道範の著作しか見当たらない。そこで実運の『瑜祇経秘訣』（成立年不詳）をみると、

凡そ此の経の十二品は、皆是れ持真言行者の法爾自然、自身成仏の法門なり。其の體は是れ普賢如来なり。種子は即ち~~ま~~字なり。此の字の字相は言説、字義は離言説不可得なり。『経』の「我本無有言」は字義の辺なり。「但為利益説」は字相の邊なり。故に有言の字相は今経の十二品の伝教法門を指す。離言の字義は一切衆生の法然本有の自體を指す。若し最上乘の者有れば、自身成仏の如義言説の自証会の談に遇⁽⁸⁰⁾う。

と先の『瑜祇経』の一文を字義と字相の二つに分けて解釈し、字相が伝教法門であり、字義が法然本有の自體であることを示している。

これは道範の『瑜祇経口決』（一二四一年成立）巻五にも、

問う、字相字義に付して有言無言を分別せば、無言を自証と為して深と為す。字相を化他と為して浅と為すか。答う、且く初重の常途の義に准ぜば然るべし。深秘の実義に依らば諸字の字相即ち本有宛然の真言なり。……(中

略)……また自証位無言説とは、是れ顕教の教相なり。『二教論』の「言語心量離不離、顕密分別」の如し。今、「我本無有言」は四種の妄言説を遣り、「但為利益説」は如義言説なり。別本に云く、「但此利益説」は是れ隨他の説なるが故に如義自性の説に非ずべし。如何。答う、此の経は自性会の説を開くが故に、此の経の前には変化等流所説の顕教権門の法、猶是れ自性法界の體なり。何ぞ況んや、此の経の「但為利益説」は、此の経の自性の説を未來の最上乘の者に被らし上るの義辺なり⁽⁸¹⁾。

と述べられており、自証位無言説の顕教と、自証の説を未來の最上乘の者に説く密教の違いを述べている。

一方、天台の澄臺(一二五九～一三五〇)は『瑜祇經聽聞抄』(一三三四年以前成立)の中で、

問う、今経は自性無言説なり。何ぞ今の文を以て利他に趣いて事を説くと云うべしや。答う、自性無言の義は覺大師の権門の心と判じたまえり。此の経の説相は内証の説に取て、横豎の義之れ有り⁽⁸²⁾。

と『瑜祇經』を自証無言説の經典とするのは円仁(七九四～八六四)の説であり、内証の説によつて横豎の義があることを述べている。

また、性心(一二八七～一三五七)は『瑜祇秘要決』(一三五七年成立)の「我本無有言事」の中で、

茲の義に因んで曰く、我れ本より言有ること無し、而して仏は未來最上乘の機を啓れみ、本有名字の章句を開示したもうが故に、「但し利益の為に説く」と云う。今時の禪者未だ秘旨を尋ねず。また教文を委ねず、輒ち文を見て義を説く。甚だ誤る者なり……(中略)……花嚴學者の曰く、「我れ本より言有ること無し」とは、果分不可説を指す。「但し利益の為」とは、因分可説の分齊なり⁽⁸³⁾。

と「我本無有言」の文をめぐった、禪者と華嚴学者の説をあげ、禪者は秘旨を尋ねずに文を見ているために誤りがあ
ることを指摘している。

以上のように、頼瑠が第四重の無相無相を述べるための典拠とした『瑜祇経』の一文をめぐって、東密では字相字
義の解釈によって顕教と異なることを述べ、天台では円仁の解釈に自証無言説があることを述べていた。そこで性心
は、「今時の禪者」でも典拠として用いるようになり、その義を誤る者がいたことを指摘している。では、禅宗にとつ
ての『瑜祇経』は無相を示すための典拠として用いられていたのだろうか、次にみていきたい。

まず、円爾弁円が癡兀大慧（二二二九〜一三二二）に伝授した講義書である『瑜祇経見聞』（一二七四年成立）を
みてみたい。本書には癡兀大慧による割注か定かではないが、『瑜祇経』の一文について次のように述べられている。

我れ本より言有ること無し。但し利益の為に説く。「此は是れ本地身の直説なり。我れ本より言有ること無し、
但し利益の為に説くとは、一智本地の直説なり。此れ本地身の直説とは望不定なり。平等身に約すときは説かざ
るなり。加持身に約すときは説くべしなり。平等身は真諦の辺。加持身は俗諦の辺なり。」⁽⁸⁾（一）〔内は割注〕

このように『瑜祇経』を典拠として、平等身は説かず加持身が説くことを述べている。

次に、『真禅融心義』（著者・成立年不詳）をみてみたい。本書は、金剛三昧院周辺で著された著作とされるが、頼
瑠と同じような四重秘釈を用いて、第四重の無相無相が禅宗の教理と一致することを述べている著作である。この四
重秘釈は、「有相有相」（初重）、「有相無相」（第二重）、「無相有相」（第三重）、「無相無相」（第四重）といい、頼瑠
の四重秘釈と比べて初重と第二重の順序が逆になっている。しかし、有相無相の順序については、

密教に依て義理を対判するに大いに分ちて二門有り。遮情門・表徳門なり。遮情は有相に通じ、表徳は無相に通じ。又た二門有り。豎差別門・横平等門。豎差別門は有相に通じ、横平等門は無相に通じ。又た二門有り。教行門・実行門なり。教行門は有相に通じ、実行門は無相に同じ。……（中略）……有相は浅義なり。劣慧の為に之を説く。無相は深理なり。上根の為に之を演ず⁸⁵。

と劣慧のための有相を浅略、上根のための無相を深秘として述べている。したがって、無相になるほど深秘になることがわかる。そこで『真禪融心義』の巻下をみると、

問う、密宗の無相三密と禪宗の無相一法は、相同じことを標示する文証はあるや。答う、両方共に経の文証有るなり。問う、何れの経に其の文証有るや。答う、密宗に依るは、『瑜祇経』に説く「我本無有言云⁸⁶」

と密禪一致を述べるための典拠として、『瑜祇経』を用いていることがわかる。文中の無相三密については、第四重の無相無相を示す箇所であらうに述べられている。

大日経疏釈の阿字無相成仏義に云く、「我本不生を覚るとは、謂く、自心本よりこのかた不生と覚る。即ち、是れ成仏して、而して実に覺なく、成無きなり云云」是れは此れ、甚深無相の無相三密の義理なり。……（中略）……此の甚深無相の無相の極理の上に、仮に有相三密の名言を立てると雖も、只だ之れ幻夢の如し。三密の義理はいまだ常途の有相三密の法門と同ぜず⁸⁷。

ここでは有相三密に対する無相三密の優位性を述べている。したがって無相が極理であることが示されている。

次に、『開見抄』（著者・成立年不詳）をみてみたい。本書は、密禪一致に立脚した東密僧が著わしたとされる。本書では、法身の内証に言説有ることを述べたあと、次のように述べられている。

疑て云く、凡そ顕密二教分別とは、偏に法身説法の有無に依る。若し法身に言説無ければ、顕宗と何ぞ別るるや。答う。顕宗は法身において独り無相無言と談ずるを、是れを名づけて法身と為す。密宗は四身において共に有相有言を談ずるを、是れを名づけて化他と為す。且く四句を以て之れを分別すとは、一つに有相有相「顕宗化他」。二つに有相無相「顕宗自証」。三つに無相有相「密宗化他」。四つに無相無相「密宗自証」。今此の第四は心を以て心を伝う^⑧。〔一〕内は割注

ここでは法身の内証に言説があるか、顕密の立場をそれぞれ述べたあと、顕教と密教をそれぞれ化他と自証に開いて、有相無相について述べている。このような四重秘釈は、『菩提心論見聞』（著者・成立年不詳）にも、

一つに色相色相「顕宗化他」、二つに色相無相「顕宗自証」、三つに無相有相「密宗化他」、四つに無相無相「密宗自証」^⑨。〔一〕内は割注

と『開見抄』に類似した思想がみられる。しかし、ここでは『開見抄』と異なり、初めの二重の名称を色相の色相、色相の無相としている。

このように『開見抄』や『菩提心論見聞』は、有相無相を顕教と密教に大きく分けた上で、自証化他の二つに分けて解釈していた。そこで両書は、自証の無相に言説がないことを示す証文として、『真実事行品』、『瑜祇経』、『大日経疏』^⑩、円珍（八一四〜九二）の『大毘盧遮那成道心目』^⑪の文を引用したあとに、典拠となる著作が数多いことを述べている。

そのため、具さに述べることが出来ず、諸学者は文に任せて義を述べていることを示していた。

以上のように、『真禪融心義』、『開見抄』、『菩提心論見聞』では有相無相について、頼諭に類似する四重秘釈を説いているものの、初重を有相（色相）有相（色相）、第二重を有相（色相）無相として、その順序が一部異なっていた。有相無相の優劣については、『開見抄』や『菩提心論見聞』では述べられていなかったが、その文意をみるに、いずれの著作も有相に対する無相の優位性を述べていた。そこで共通の典拠としてあげられていたのが、「真実事行品」の一文と、『瑜祇経』であった。

先述したように、古来より天台では「真実事行品」を典拠として、無相の優位性を説く傾向があった。しかしながらこれらの著作では、『瑜祇経』について言及されてこなかった。したがって、無相の優位性を説くために『瑜祇経』を用いるようになったのは、頼諭と同時代、あるいは近い年代の禅宗と接点があったことが考えられる。そこで次に、頼諭と同時代の禅宗僧は有相無相をどのように理解していたのか、最後にまとめてみたい。

円爾に参禅したとされる無住道暁（一二二六～一三二二）は、『沙石集』（一二七九年成立）巻一〇末の「建仁寺の門徒の中に臨終目出き事」の中で、

坐禅観法の真実の相応の処、真言も禅門も隔てなくや。文字を立て、文字を立てず、少しの変わりなし。禅門は直に上根を接し、真言は文字を立て、中下を導くばかりなり。実証の処、異なるべからず。祖師の意、多くかくの如し^④

と真言と禅は機根による違いはあれども教えは同じ不立文字、すなわち無相であることを述べている。この機根については、巻五末の「権化の和歌翫び給う事」に、

「禪教の差別は方便の位にあり。実証の所は異なるべからず」と見えたり。……(中略)……機情を守り、生熟を待ちて、浅きより深きに進め、有相より無相に入る事、これ中下の根を接する方便なり⁽⁹³⁾

と有相によって無相に入るとは中下の根を損する方便であると述べている。このほかにも無住道暁は『聖財集』(成立年不詳)の「起念を行うべからざる事」⁽⁹⁴⁾で、無相無念をもって密教と禪宗が同じであることを述べている。

また禪の優位を貫いたとされる夢窓疎石(一二七五—一三五二)は、『夢中問答』(成立年不詳)の中で、

密宗は、十界の凡聖、本位をあらためず。全くこれ大日如来なりと談ず。……(中略)……しかれども、いまだ深理に達せざる人を誘引せんために、有相の悉地を明かせり。かようの方便をば、教門に讓る故に、禪門には、直に本分を示すのみ⁽⁹⁵⁾

と密教が方便によって有相の悉地を説いているのに対して、禪は直に本分を示していることを述べている。本分とは、「本分の田地」のことで「諸仏・賢聖の智慧、乃至衆生の身心、及び世界国土は、皆この中より出生せり」⁽⁹⁶⁾ものであり、禪の究極の境地のことである⁽⁹⁷⁾。

このように、密宗でも無相の優位性を説くために、機根の解釈を典拠としていたことが考えられる。そこで、密教との一致、あるいは禪を究極として述べられるようになった。

以上より、『瑜祇経』を第四重の無相無相の典拠として用いたことは、前節で示した無相の優位性を説いていた天台にはみられない特徴であった。そこで頼諭在世時になると、『瑜祇経』を用いて無相を述べていた著作もあることがわかった。またこれらの著作には、禪に関する記述があることから、頼諭と同時代の禪宗僧との関連性もみられた。

頼諭は、第四重の無相無相を説くために、『瑜祇経』を用いて自証無相位を示し、また『瑜祇経』が利益の為に説

かれたものであることを示していた。これは、当時『瑜祇経』を理解せずに文のみを典拠として無相を説く、禪宗などを包括する解釈であるため、当時の禪宗が頼諭の加持身説へ何らかの影響を与えていたようにも思える。いずれにしろ、頼諭の有相無相の四重秘釈は、加持身説の典拠となる重要な思想である。

そこで最後に、有相無相の四重秘釈が真言教学においてどのような影響を与えたのか、各学派の宗義決撰書よりまとめていきたい。

五、有相無相の解釈の展開

有相無相の論義は、真言密教の新古両学派において、盛んに論じられてきた問題である。なぜなら、この問題は本地・加持の教主論にまで及んでいるためであった。そこで頼諭以降になると、根来寺、東寺、高野山を中心に、各教学が発達していった。これらの教学はその特色をふまえて、根来の加持身説（新義）、東寺の不二門学説、高野の不二門学説（宝門）、不二門学説（寿門）と称されている。本項では、これらの教学的特色がみられる代表的な宗義決撰書を取り上げて、有相無相の問題が後世どのように展開していったのか考察してみたい。

そこで、(一) 新義学派、(二) 東寺学派、(三) 覚海・法性・玄海等の学风を承けた宝性院（宝門派）、(四) 道範・杲宝の学风を承けた無量寿院（寿門派）に分けて、有相無相の展開をみていきたい。

(一) 新義学派

聖憲（一三〇七〜一三九二）は、『大疏百条第三重』（成立年不詳）の「無相至極」で、

問う、此の義は自宗において、唯だ真諦のみ有り、俗諦の法無しや。答う、二義あり。一には遮情を以て俗諦と為し、表徳を以て真諦と為す故に、俗諦無相、真諦有相なり。遠く顕に異なり。一には漏泄、顕を以て俗諦と為し、密を以て真諦と為す。また一義有り。勝劣二機の為に説くところの有相無相の法門なり。有相を以て俗諦と為し、無相を以て真諦と為す。無相と云うと雖も、一心無相に同ぜず。法法自爾にして、方便の相無きが故に、無相と云うなり。

無相至極の学者の義「真諦の中に仏なし、衆生なしと説く」は、先の如く、顕の真諦無相の義を述ぶるなり。「真諦の中に仏有り、衆生有りと説く」は、真諦の言はなお、前の顕の真諦を呼ぶなり。意は顕の無相の真諦を「有仏有衆生」と説けば、密の俗諦の法門となるなり。此の「有仏有衆生」の重に、勝劣二機に破る有相無相の二重あるべきなり。此の二重は密においてはなお、俗諦なるが故に、此の上に「五居足断じて十慮手亡す」至極の無相を真諦と為すなり。彼の位をばまた、「無仏無衆生」と云うべきなり。此の義にては、顕の真諦と密の俗諦とを合して、此の二諦と云うなり。先の義にては、顕密の各の真諦を取って、二諦と云うなり。真真二諦なり⁸⁶。

と真言宗における伝統的な有相無相の解釈をあげたのち、頼瑜の四重秘釈についてまとめている。そこで、機根の違いによる有相無相について述べたあと、真俗二諦について述べている。

(二) 東寺学派

頼宝(一二七九〜一三三〇)は、『真言名目』(十四世紀前半成立)の「有相無相事」で、

有相無相に重重有り。淺略義に、有相とは、凡夫所知の色心の諸法の事相は顕了にして、心前に現行し了し易く知り易きを有相と云うなり。無相とは、諸法の體性は如幻虚仮、自性空にして無色無形、一相も存せざるが故に、

無相と云うなり。深秘義に、有相とは、一切法各々の相分明にして住するなり。無相とは、一相の中に一切の相を具して、一相に留まらざるを云うなり。一切の相を具して一相無きが故に無相と云うなり。非色非形に非ずなり。先の義は常途の顕教の意なり。後の義は真言表徳の義なり⁽⁹⁾。

と有相無相を浅略の有相無相、深秘の有相無相に分け、浅略の有相無相を常途の顕教、深秘の有相無相を真言表徳としている。

また臬宝（一三〇六―一三六二）は、『大日経疏演奥鈔』（成立年不詳）巻七で、

凡そ有相無相の相對は判釈多途なり。大いに約して之れを云うに則ち三意有り。一に、相は相状なり。色心等の法の状相を有相と名づけ、無色無形の空理を無相と名づく。常途の諸教は盛んに此の釈を作す。今此の『疏』の中に、世間三昧道を有相と名づけ、十縁生句觀を無相と名づくるは即ち此の義なり。二に、相は差別の義なり。……（中略）……三に、相は造作の義なり。……（中略）……是れ則ち有為生滅の法を有相と名づけ。無為常住の法を無相と名づく⁽¹⁰⁾。

〔 〕内は割注

と有相無相について相状（顕教）、差別、造作の三つの方面より解釈している。また『開心抄』（一三四九年成立）巻上の「秘密修禪門」では、

問う、或禪者に云く、『大日経』に云く、甚深無相法は、劣惠の堪えざる所、彼等に応ぜんが為の故に兼ねて有相の説を存せり云々。大師の釈に云く、秘藏の奥旨は文を得ることを貴ばず。只だ心を以て心を伝うるにあり。文は是れ糟粕、文は是れ瓦礫なり云々。此等の文に依て、密教もまた無相の心性を以て甚深所宗と為す。手作口

誦の事は皆、是れ兼存有相説なり。秘感奥旨は禪家の本分、帰すところに浅深無し云々」此の事は如何。答う、有相無相の分別は説相交参し、疑義解し難し。『経』に甚深無相を説くを釈して云く、秘感奥旨は若し祖承口決を受けざれば、輒ち文に任せて義を取る。定んで魯魚の錯有るか。禪者比判するに頗る論を為すに足らず。凡そ以心伝心は、両部の肝心、一家の秘府なり。……（中略）……此の宗意は有相無相異なると雖も、曼荼羅莊嚴は儼然として缺無し。豈に禪門所宗に同ずべしや^(四)

と或る禪者の疑問に対して、『大日経』によつて「有相と無相は異なると雖も曼荼羅莊嚴において儼然として欠くものはない」とし、禪門所宗と異なることを述べている。また別本の「秘密修禪門」では、次のように答えている。

其の旨は正しく『無畏疏』に在り。然れば則ち高祖の釈の以心伝心は、彼の以心灌頂を指す。予、親り先師に従い忝く此の奥旨を伝うるは、誠に是れ秘中の秘。極中の極なり。従うと雖も禪家の宗風を窮めて、若し秘蔵の淵府を伺わざれば、争輒ち其の至蹟を判ずべしや^(四)

（傍線筆者）

ここでは、以心灌頂によつて奥旨を伝えるのは秘中の秘、極中の秘であることを明かしている。

以上のように、杲宝は或る禪者に対して、禪宗の無相と密教の無相とが異なることを述べている。そのほか、杲宝は『杲宝私抄』（一三四〇年成立）巻五の「自証極位言説有無事」で、『瑜祇経』の文について次のように言及している。

「我本無有言」等の経文に至りては、「我本無有言」とはま字なり。離言説の字なるが故に「無有言」と云う。「但為利益説」とは諸尊の三昧なり。追つて之れを案ずべし^(四)

ここでは、実運と同じく字義について明らかにしている。

また賢宝（一三三三〜九八）は、『覺母鈔』（成立年不詳）の巻四で、

私に云く、十縁生句を以て諸法を視るに、無性は是れ初重の無相なり。此の上に明かすところ、大空三昧とは是れ第二重の無相なり。『十住心論』第三に云く、「一切世間の縁起の法は種々の形、種々の相を具す。若し阿字門に入らば、悉く一切の相を離れる。離相の相は相として具せずということなし、是れ則ち法身普現色身にして、各々四種曼荼羅を具す」と文り^(四)

と十縁生句を以て初重の無相を説き、大空三昧が第二重の無相であることを述べている。そして、頼瑜が第三重の証文とした『十住心論』を引用している。

(三) 宝門派

有快は、『宗義決択集』（成立年不詳）の巻四の「自証極位」で、

『秘経』の「我本無有言」の文は、此は^イ字の字義、言説不可得に結歸するなり。凡そ諸の字門に相と義の二つ有り。今、^イ字の字相は、言説、字義は言説不可得なり。此の所遣の言説は字相の妄言説なり。故に「我本無有言」と云う。謂く、大日法身は本より自ら妄言説無ければなり。「但為利益説」とは、如義語を以て利益の為に之れを説くと云う義なり^(五)

と『瑜祇経』の一文について言及している。しかし、「真実事行品」については言及していない。

(四) 寿門派

印融(二四三五〜一五一九)は、『杣保隱遁鈔』(一五一六年成立)の卷一四の「相無相真実事」で、

余教の談門は会通に及ばずに候う。自宗の談門は、経疏の文に付して四重秘釈を作り候う時に、初重は有相浅権、無相深実、第二重は有相無相浅権、第三重は有相無相深実、第四重は無相浅権、有相深実と意を得るべきに候う。随つて『要略念誦経』に、「相無相甚深、少智不能入、依無相説相、撰彼二種人」と説きたまいて候う。此の文の中の、「相無相甚深」は、第三重相無相真実の文にて候う。「依無相説相」は、第四重無相浅権有相深実の文にて候う。「撰彼二種人」は、第三重第四重の二人にて候う。此の文の意を以て難文を会通し申すに候うは、先づ『大日経』の「甚深無相法」等の文を『不思議疏』に釈せらるる候う時、「甚深無相法」とは本不生の理なり。著相の劣慧は悟入することを得ずの故に釈して候う。此の意に「甚深無相法」とは、本不生の理にて候う。此の理には、著相劣慧の有相の機は悟入せざるところにて候う。此の初重の有相浅権無相深実の分齊に候う。之に依て難勢に引証せらるる無相甚深の文は、初重の分齊にして第四重には及ぶべからず候う。来れる所の難勢を加様に会通申さば、講答成立するところにて候う⁽¹⁶⁾

と四重秘釈を用いて有相無相を解釈している。すなわち、初重を有相浅権・無相深実、第二重を有相無相ともに浅権、第三重を有相無相ともに深実、第四重を無相浅権・有相深実と説いている。そして「真実事行品」の一文、「甚深無相」を本不生の理にして、劣慧の有相の機は悟入しないことを述べている。このように、印融が有相を甚深と解釈していることは、『古筆拾集抄』(一五〇一年頃成立)卷三の「相無相分別之事」⁽¹⁷⁾よりも明らかである。

以上のように、頼瑜によって提唱された有相無相の四重秘釈は、聖憲によってまとめられているが、東寺学派や古

義においてはあまり用いられていなかった。また、四重秘釈を説いている印融にしても、初重で無相の浅略を説き、第四重で有相の深秘を説く、古来の真言宗を踏襲するようなものへと展開していったと考えられる。

六、おわりに

頼諭の説く有相無相の四重秘釈は、加持身説法の教理学的論拠となる自証極位無相を述べるために、『大日経』の「真実事行品」、『大日経疏』、『瑜祇経』、それに『十住心論』や『秘蔵宝鑰』などの空海の著作を典拠として用いていた。そこでこれらの証文を見てみたところ、『大日経』の「真実事行品」は有相無相の解釈をめぐって、天台においては安然の頃より無相の優位性を示すための典拠としてたびたび用いられてきた。しかしながら、『瑜祇経』は無相を説くための典拠として用いられてこなかった。それが頼諭のころになると、禅について論述している著作の中で、無相の優位性を示すための典拠として用いられるようになっていた。これらの著作では、頼諭の有相無相の四重秘釈と同様な解釈方法を用いて無相の優位性を述べていた。

頼諭の有相無相の四重秘釈は、『大日経』の「真実事行品」を用いて第二重の有相無相、第三重の無相有相を述べていた。また『瑜祇経』を用いて、本より言説なきもの（第四重の無相無相）を利益のために説いている（第三重の無相有相）ことを明らかにした。そのうえで頼諭は、自証極位の無相、すなわち第四重を無相無相とし、真言宗では無相を至極とすることを述べた。

したがって、頼諭の有相無相の四重秘釈は、天台において異議が唱えられてきた「真実事行品」の証文を第二重の有相無相、第三重の無相有相に包括していた。さらに、密禅一致など禅との融合や一致、あるいは禅の優位性を説く著作において無相を示す典拠として用いられてきた『瑜祇経』を、第三重の無相有相を説く經典とするなどの特徴が

みられた。これは、結果として他宗において取り上げられた無相有相の問題を終結させたと考えられる。

このように頼諭の四重秘釈は、加持身説法を提唱すると同時に、当時の天台において取り上げられていた有相無相の問題に対する解答であり、また終結させたものとも考えられる。したがって、頼諭の四重秘釈は、頼諭在世時に置いて有相無相の問題を取り上げていた他宗を意識していた可能性も考えられるのではないだろうか。これについては、今後の課題としたい。

註

- (1) 松崎恵水「二九六六」「四重秘釈について——その布教上における意義——」(『豊山学報』一二)
- (2) 藤田隆乘「二〇〇一」「頼諭の「四重秘釈」について」(『智山学報』五〇)、同「二〇〇二」「頼諭の著作と新義真言教学」(『中世宗教テクストの世界へ』、名古屋大学大学院文学研究科)
- (3) 高柳さつき「二〇〇二」「伝采西著『真禅融心義』の真偽問題」(『印度学佛教学研究』五〇—二)、同「二〇〇四」「伝采西著『真禅融心義』の真偽問題とその思想」(『禅文化研究所紀要』二七)、同「二〇〇八」「日本中世禅思想研究——聖一派を中心に——」(課程博士論文)、同「二〇一〇」「鎌倉臨濟禅における禅密関係の思想的系譜——円爾—頼諭—『真禅融心義』を辿りながら——」(『禅学研究』八八)
- (4) 田戸大智「二〇〇九」「菩提心論開見抄」の検討」(『印度学佛教学研究』五七—二)、同「二〇一〇a」「東密における禅——『菩提心論開見抄』を中心に——」(『日本仏教総合研究』九)、同「二〇一〇b」「東密教学の展開と形成」(課程博士論文)
- (5) 『大毘盧遮那成仏経疏』卷三(大正蔵三九、六〇九下)
- (6) 『大毘盧遮那経供養次第法疏』(大正蔵三九、八〇七下)
- (7) 『胎藏金剛菩提心義略問答抄』卷一(大正蔵七五、四五八下)

- (8) 『四重秘釈』、『密教大辞典』、九三二頁
- (9) 『大日經疏指心鈔』卷五(大正蔵七九、六三六上・中)
- (10) 『大日經疏指心鈔』卷五(大正蔵七九、六三六上・中)
- (11) 『大毘盧遮那成仏神變加持經』卷一(大正蔵一八、一下)
- (12) 『大日經疏指心鈔』卷一五(大正蔵七九、七八二下)
- (13) 『大日經疏指心鈔』卷一五(大正蔵七九、七八二下)
- (14) 『大日經疏指心鈔』卷五(大正蔵七九、六三六中)
- (15) 『大毘盧遮那成仏神變加持經』卷一(大正蔵一八、四下)
- (16) 『大日經疏指心鈔』卷一五(大正蔵七九、七八三中)
- (17) 『今この經に依りて真言行者の住心の次第を顕わす。顕密二教の差別もまたこの中にあり』、『秘密曼荼羅十住心論』卷一(弘全一輯、一二九〜一三〇)
- (18) 『大日經疏指心鈔』卷一五(大正蔵七九、七八三中)
- (19) 『大日經疏指心鈔』卷五(大正蔵七九、六三六中)
- (20) 『秘密曼荼羅十住心論』卷三(弘全一輯、一五一)
- (21) 『大日經疏指心鈔』卷二(大正蔵七九、五九五中)
- (22) 『大日經疏指心鈔』卷一三(大正蔵七九、七八二下)
- (23) 『大日經疏指心鈔』卷五(大正蔵七九、六三六中)
- (24) 『大毘盧遮那成仏經疏』卷一九(大正蔵三九、七七三下〜七七四上)
- (25) 『金剛峰樓閣一切瑜伽瑜祇經』卷下(大正蔵一八、二六九下)
- (26) 『大毘盧遮那成仏神變加持經』卷一(大正蔵一八、一下)

- (27) 『大毘盧遮那成仏神變加持經』卷一（大正蔵一八、四下）
- (28) 『大毘盧遮那成仏神變加持經』卷七（大正蔵一八、五四下）
- (29) 『大毘盧遮那成仏神變加持經』卷七（大正蔵一八、五四下）
- (30) 『秘密曼荼羅十住心論』卷三（弘全一輯、二五二）
- (31) 『金剛峰樓閣一切瑜伽瑜祇經』卷下（大正蔵一八、二六九下）
- (32) 『大毘盧遮那成仏経疏』卷一九（大正蔵三九、七七三下）
- (33) 『大毘盧遮那成仏経疏』卷一九（大正蔵三九、七七四上）
- (34) 『自宗意以無相可為極耶事』、『大疏第一愚草』（藤田隆乘「二〇〇二」（前掲註②）
- (35) 『瑜祇経拾古鈔』卷下（日蔵一七、八八上）
- (36) 『顕密問答鈔』卷下（統真全三三、一七〜一八）
- (37) 『金剛頂経開題愚草』（金剛頂経研究会「一九九五」、「一九九六」共同研究）頼瑜撰『金剛頂経開題愚草』本文と国訳（一）、（二）、『大正大学綜合佛教研究所年報』一七、一八）
- (38) 『阿字秘釈』卷中（『阿字秘釈』研究会編「二〇一二」『頼瑜記阿字秘釈』、五九〜六一頁）
- (39) 藤田隆乘「二〇〇二」（前掲註②）
- (40) 『十住心論衆毛鈔』卷七（真全三七、四八〇下）
- (41) 「相に即して無相なり、無相に即して一切相を具するなり」、『大毘盧遮那成仏経疏』卷一九（大正蔵三九、七七〇上）
- (42) 「凡そ諸の所有の挙手動足は皆、密印と成り、所有の言語は便ち真言と成り、所有の心念は自ら定慧と成つて万徳自嚴なり」、『五輪九字秘密釈』（興全下、二五二）
- (43) 「阿字の意深くして空寂の體なり。方法の母なり。大灌頂王なり」、『三種悉地破地獄転業障出三界秘密陀羅尼法』（大正蔵一八、九一〇中）

- (44) 「然も此の心源は微妙寂絶にして無名無相なり」、『大毘盧遮那成仏経疏』卷二二（大正蔵三九、七〇五下）
- (45) 「五居足断え、十慮手亡ず」、『遍照發揮性靈集』卷七（弘全第三輯、四七九）と『釈摩訶衍論』卷五（大正蔵三二、六三七下）の合釈か（勝又俊教編「二九八一」『真言の教学』、六〇四頁）
- (46) 「月即ち是れ心なり、心即ち是れ月なり」、『大乘本生心地観経』卷八（大正蔵三、三二八下）
- (47) 「𠬪字素光の色を炳現す」、『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』（大正蔵三二、五七四中）
- (48) 「𠬪字は是れ金剛輪なり。○然も此の字の形体もまた方なり。此の字、正方にして金剛の色に作らしむと観ず」、『大毘盧遮那成仏経疏』一六（大正蔵三九、七四九上）
- (49) 「体は潔白の体なり。形相は満月の如し」、『異本即身成仏義』（弘全第四輯、八）
- (50) 藤田隆乘「二〇〇二」（前掲註2）、六一頁
- (51) 「三寶院流地蔵院方相承系括大事并口伝」（『東密諸法流印信類聚』卷二、二五六）
- (52) 藤田隆乘「二〇〇二」（前掲註2）、六七頁
- (53) 「三寶院地蔵院流美勝頼瑜相承 長続印信」（『東密諸法流印信類聚』卷二、一五六）
- (54) 朱書で第三重とある。（『東密諸法流印信類聚』卷二、一五六）
- (55) 「道教不共ノ大事」の第三重印明には、六大の一つである識大（の総字）をあらわす𠬪字が欠落している点。真空の有相無相の解釈が、初重から第三重の三重解釈であるのに対して、後世において頼瑜の四重秘釈は、第二重から第四重の三重釈に初重（浅略）を加えたとして理解されている点。など
- (56) 高柳さつき「二〇〇八」（前掲註3）
- (57) 田戸大智「二〇一〇b」（前掲註4）
- (58) 榊義孝「一九七七」「加持身説の成立過程について」、『豊山教学大会紀要』五
- (59) 『大疏百條第三重』卷五（大正蔵七九、六七五上）

- (60) 「有相無相」、『密教辞典』四二頁
- (61) 『大毘盧遮那成仏神變加持經』卷七（大正蔵一八、五四下）
- (62) 窪田哲正「一九九二」『雑々抄』における円密勝劣論——「顕密二宗同異事」の所説をめぐって——」（『天台思想と東アジア文化の研究』、同「一九九二」日本天台における有相三密方便説——「兼存有相説」の解釈をめぐって——」（『仏教における心と形』、日本仏教学会）
- (63) 『真言宗教時義』卷四（大正蔵七五、四四五上）
- (64) 『真言宗教時義』卷四（大正蔵七五、四四五中）
- (65) 『大毘盧遮那成仏神變加持經』卷二（大正蔵一八、十下）
- (66) 窪田哲正「一九九二」（前掲註62）、一五二頁）
- (67) 『天台真言二宗同異章』（大正蔵七四、四二〇上）
- (68) 『大日経見聞』卷三（日本蔵二六、一五上・下）
- (69) 『大日経見聞』卷八（日本蔵二六、一〇五上）
- (70) 『明矢石論』（日蔵六三、二九二）
- (71) 『二帖抄』（天全九、一五二下）、『二帖抄見聞』卷下（天全九、二九四下）、『等海口伝抄』（天全九、五六三上）
- (72) 『二帖抄』卷下（天全九、一五二上）
- (73) 窪田哲正「一九九二」（前掲註62）、一五〇頁）
- (74) 『胎藏金剛菩提心義略問答抄』卷一（大正蔵七五、四五八下）
- (75) 窪田哲正「一九九二」（前掲註62）に掲載）
- (76) 『溪嵐拾葉集』卷九六（大正蔵七六、八一六中）
- (77) 『溪嵐拾葉集』卷九六（大正蔵七六、八一六中）

- (78) 『溪嵐拾葉集』 卷九六 (大正蔵七六、八二六中)
- (79) 『溪嵐拾葉集』 卷九六 (大正蔵七六、八二六下)
- (80) 『瑜祇経秘訣』 卷下 (真全五、二六七)
- (81) 『瑜祇経口決』 卷五 (真全五、一三三下)
- (82) 『瑜祇経聴聞抄』 卷上 (統天全〈密教二〉、二六九下)
- (83) 『瑜祇秘要訣』 卷一二 (真全五、四三三下〜四三三上)
- (84) 『瑜祇経見聞』 (統天全〈密教二〉、二〇九下)
- (85) 『真禪融心義』 卷上 (中尾良信「二九八〇」前掲註(71)に掲載)
- (86) 『真禪融心義』 卷下 (中尾良信「二九八〇」)
- (87) 『真禪融心義』 卷上 (中尾良信「二九八〇」)
- (88) 『菩提心論開見抄』 (田戸大智「二〇〇八」紹介、一二四頁)
- (89) 『菩提心論見聞』 卷四 (大正蔵七〇、一一三中)
- (90) 「自証の境は、説者も無言、観者も無見なり」、『大毘盧遮那成仏経疏』 卷一 (大正蔵三九、五八五上)
- (91) 「無生の相は法界宮に現じ、無染不染の相は五大の色を具す。無言不言の相は三昧耶を説く」、『大毘盧遮那成道心目』 (日仏全 二六、六四八下)
- (92) 『沙石集』 卷一〇末ノ一三 (〈新編〉日本古典文学全集五二、六〇二頁)
- (93) 『沙石集』 卷五末ノ七 (〈新編〉日本古典文学全集五二、三〇三頁)
- (94) 「方便は重々あれども行業の落居する所は皆、無相無念なり。密も禪も其の意同じかるべし」、『聖財集』 卷下 (国立国会図書館、近代デジタルライブラリー、八六頁)
- (95) 『夢中問答』 卷上 (講談社学術文庫『夢中問答集』、一五頁)

- (96) 『夢中問答』 卷下 (講談社学術文庫 『夢中問答集』、六三三頁)
(97) 詳しくは、末木文美士「二〇〇八」『鎌倉仏教展開論』(トランスビュー、二六七頁)
(98) 『大疏百條第三重』 卷五 (大正蔵七九、六七六中)
(99) 『真言名目』 (大正蔵七七、七三四中)
(100) 『大日經疏演奥抄』 卷七 (大正蔵五九、七二中)
(101) 『開心抄』 卷上 (大正蔵七七、七四二下)
(102) 『開心抄』 卷上 (大正蔵七七、七五二上)
(103) 『杲宝私抄』 卷五 (真全二〇、八〇七)
(104) 『覺母鈔』 卷四 (国立国会図書館、近代デジタルライブラリー、一四〇一五頁)
(105) 『宗義決択集』 卷四 (真全一九、七三下〜七四上)
(106) 『杣保隱遁鈔』 卷一四 (真全二〇、三九九下〜四〇〇上)
(107) 『古筆拾集抄』 卷三 (真全一八、三三九上)